

# 慈雲尊者と密教

— 『両部曼荼羅随聞記』を中心として —

伊  
藤  
堯  
貫

# 慈雲尊者と密教

— 『両部曼荼羅隨聞記』を中心として —

伊藤 堯 貫

はじめに

慈雲尊者欽光（一七一八—一八〇四）は、江戸時代に活躍した真言律宗の名僧であり、戒律復興をはじめとし、梵学の研究、雲伝神道の提唱など、その生涯にわたって数々の大きな業績を残した。<sup>〔1〕</sup>

慈雲は、生涯を通じて戒律の復興に努め、正法律を創唱し、また『方服図儀』『南海寄帰内法伝解纒鈔』をはじめとする多くの律に関する著作を著した。慈雲は、当時行われていた律を、後世の私見や臆説が混じっているものと断じ、根本にさかのぼって如来の正法に帰るべきであると考え、如来の説いた正法にもとづく律、「正法律」を創唱した。

慈雲尊者と密教

また慈雲は、西洋から近代的なサンスクリット研究が導入される以前に『普賢行願讚』『般若心経』『阿弥陀経』などの梵本の研究を独力で行っており、四十八歳の時には、『普賢行願讚』の梵本を講述している。また晩年の著作である『理趣経講義』では、漢訳の理趣経を梵語に復元することを試みている。慈雲の梵語研究の集大成が

『梵学津梁』である。この書は、梵語関係資料を収集し、その資料および研究の成果を編纂した一千巻からなる大部の叢書である。

また慈雲は、晩年、神道に関する研究に力を注ぎ、神道に関する多くの著作を著し、さかんに伝授を行った。慈雲が唱えた神道説は、慈雲所伝の神道の意を示して雲伝神道と呼ばれる。また慈雲が住んでいた葛城山にちなんで葛城神道ともいう。慈雲は、仏教は無為の法、神道は有為の法であり、仏教の無為の法が世間の有為法に顕れたものが神道であるとし、また密教を知る事によって、神道の真意を知ることができ、密教の意によって神道を解釈すべきことを主張している。

その他、慈雲の代表的著作の一つに『十善法語』がある。これは、京都阿弥陀寺で、安永二年（一七七三）十一月八日から翌年にかけて、十回にわたって行われた十善戒の講義を門弟がまとめたものであり、十善戒の戒相と功德を説き、その記述は非常に懇切で平易である。

慈雲は西大寺流に属する真言僧でもあるが、その密教思想よりも、以上のような戒律復興、梵学の研究、雲伝神道の提唱、十善戒による民衆教化といった点から語られることが多い。また慈雲の思想の特徴として、超宗派的な性格や、釈迦在世を理想とするといった点が挙げられる。<sup>(2)</sup> たしかに慈雲は、

宗旨がたまりは地獄に出するの種子、祖師びいきは慧眼を瞎するの毒藥。（『短篇法語集』『慈雲尊者全集』第一四卷、二二三頁）

と述べており、自宗にたいする盲信を諫めている。また、

今正しく私意を雑へず、末世の弊儀によらず、人師の料簡をからず、直に金口所説を信受し、如説修行するを、正法律の護持と云ふなり。（『根本僧制并高貴寺規定』『慈雲尊者全集』第六卷、八三頁）

と、正宗に偏向することなく、釈尊の所説のままに修行することを述べている。また密教に関しても、

問ふ。真言宗の長短いかに。答ふ。弘法大師古今の英傑なること支那にも称する処なり。惠果阿闍梨に法を継いで両部の深奥末世迄に伝承す。嵯峨天皇の密契にて我国の神道特に此の宗に相承する等、その長所たる知るべし。その短処は末世の弟子たる者乃祖の大志に達せず、動もすれば奇妙不思議を唱へ出して邪命養生の者多し。〔『龜細問答』『慈雲尊者全集』補遺、一〇七—一〇八頁〕

と、真言宗の長所とともに短所も挙げており、真言宗自体も絶対視することなく、他宗と同様に相対化されているようにみえる。真言宗には弘法大師空海による顕密の教判、十住心論の教判があるが、はたして慈雲は真言宗自体も絶対視することなく相対化しているのか。また真言宗では、釈尊を大日如来の變化身としてとらえるが、慈雲の釈尊観はどのようなものであったのか。このような点について、慈雲の密教思想からどのように捉えらるるかに注意して、慈雲の密教に関する代表的著作である『両部曼荼羅隨聞記』に従って、慈雲の密教思想を考察してみたい。

### 慈雲の密教修学と著作

慈雲は、享保十五年（一七三〇）十三歳の時に、大阪の法楽寺（大阪市東住吉区田辺）で、忍綱貞記和上を師として出家、十四歳の時に悉曇を授かり、十五歳の時に四度加行を修した。十六歳から十八歳までの三年間は、師匠の貞紀の命により、京都で伊藤東涯などの諸学者から儒教を学んだ。その後、元文元年（一七三六）十九歳の時、河内の野中寺で、秀岩和尚に従って、沙弥戒を授かり、元文二年（一七三七）三月、二十歳の時には秀岩和尚より灌頂を受けている。またこの年の秋から冬にかけて戒龍和尚を訪ね、秘密儀軌を学んでいる。元文三年

(二七三八)、二十一歳の時、貞紀に従って、西大寺流をはじめ、報恩院流、勸修寺流、中院流、三輪流、松橋流、安祥寺流の諸流の灌頂を受けている。翌年には、十九山村墓寺の大輪より阿字觀を受け、また貞紀和尚より西大寺流伝法灌頂と両部神道を受けている。

このように、十四歳から二十二歳にかけて密教を学んでいる慈雲であるが、密教に関する著作は晩年に集中している。寛政七年(一七九五)、七十八歳の慈雲は、高貴寺において両部曼荼羅を講伝する。この時の講伝を弟子の菩提華祥瑞が筆記したものが『両部曼荼羅随聞記』二巻である。翌年、慈雲がふたたび、阿弥陀寺において両部曼荼羅を講伝すると、菩提華は、またこの講伝を筆記して『両部曼荼羅随聞記』六巻としてまとめた。つまり、『両部曼荼羅随聞記』には二巻本の略本と六巻本の広本の二種類がある。また享和二年(一八〇二)、八十五歳の慈雲は、『金剛薩埵修行儀軌私記』一巻を記し、翌年には、漢訳の『理趣經』について還梵を試みた『理趣經講義』三巻を著した。そのほか、密教に関する著作に『因曼荼羅深』『密機説』『野沢相承口決』『教王經釈』『三昧耶戒和釈』などがある。

これらの慈雲の密教に関する著作の中でも、『両部曼荼羅随聞記』は、密教についての深い洞察のもと、金剛界曼荼羅と胎藏曼荼羅について、詳細に解説を施している書である。『両部曼荼羅随聞記』六巻の構成は、

第一巻・・・・・・・・・・両部大綱領

第二巻〜第三巻・・・・金剛界九会

第四巻〜第六巻・・・・胎藏法十三大院

となっている。<sup>(3)</sup>第一巻で、曼荼羅をはじめとする密教の概要を述べ、第二巻より第三巻に金剛界曼荼羅、第四巻より第六巻に胎藏曼荼羅が説明されている。また最後に附録として、菩提華が曼荼羅に関する十のテーマごとに

編集した「附録十由」が付されている。この『両部曼荼羅隨聞記』は両部曼荼羅を理解する上で重要な書として重んじられており、慈雲の密教に関する代表的な著作といえよう。

### 現図曼荼羅と『大日經疏』

慈雲にとつて、両部の現図曼荼羅は、密教の根本である。

密教は図像を以て其の体とす。此れ乃大師の恵果に受け玉ふ所の秘訣にして、吾西大寺流の親伝なり。故に密教は曼荼羅を以て体とす。其の中經疏の曼荼を以て浅略とし、現図の曼荼を以て深秘とす。〔『両部曼荼羅隨聞記』「慈雲尊者全集」第八卷、七四頁〕

このように曼荼羅を密教の根本とすることは、弘法大師空海が恵果より授かつた秘訣であるとされる。そして經疏の曼荼羅は浅略であるのに対して、現図曼荼羅は深秘であると説き、經疏の曼荼羅よりも、現図曼荼羅を重視している。また、『大日經』と『大日經疏』と現図曼荼羅の三者の關係については、

釈迦院に就き、当流の相承、大日經は浅略深秘の意を含み、大疏は浅略の辺を伝へ、現図は深秘の辺を伝ふと云ふ。故に此の院第二重とするは深秘とし、第三重とするは浅略なり。〔『両部曼荼羅隨聞記』「慈雲尊者全集」第八卷、二八一頁〕

と述べている。すなわちこれは、『大日經』において、釈迦院は第二重、文殊院は第三重に配置するように説かれていたのを、『大日經疏』では、釈迦院と文殊院を入れ換え、釈迦院を第三重とすると説いていることに関して、慈雲が説明したものである。そして、『大日經』は浅略と深秘の両方の意を含んでおり、釈迦院を第三重に配置する『大日經疏』は浅略であり、第二重に配置する現図曼荼羅こそが深秘であるとしている。

このように慈雲が、現図曼荼羅を重視し、『大日経疏』を浅略とするのは、付法の八祖による相承が密教の正統であり、善無畏・一行は傍系に属するからである。これについて、慈雲は次のように述べている。

此の旋轉不旋轉を習ふは、即是れ八祖相承の嫡伝なり。故に伝持の祖師無畏一行と云へども、此の旋轉の伝無しと見えたり。是を以て唯是れ付法の祖師正嫡の規模と信すべき者なり。何を以てか之を言ふ。大疏に云く、北方無動仏は経の謬なり。此は是れ瑜伽の義なりと云へり。相承の義にては経文謬に非ず。蓋し一行阿闍梨の疏、古今独歩なり。其の初普寂に就て禅法を受け、達磨宗北漸の趣を究め給へり。此より密に入て無畏の親伝を受く。故に疏釈の妙は賢首天台の比する所に非ず。然れども受学に至ては、阿闍梨所伝の図のみにして、現図の深秘を隔つ。以て明し。大師相承の口伝、疏の説相より高きことを。(『両部曼荼羅隨聞記』)

『慈雲尊者具王集』第八卷、一五〇頁

すなわち、旋轉不旋轉の伝は八祖相承の正統な相伝であり、傍系の善無畏・一行であっても、これを伝えていない。また『大日経疏』が、『大日経』の北方無動仏を経文の誤りとする事について、相承によれば、これは誤りではない。一行は普寂に禅を学び、後に善無畏より密教を学んではいるが、その学んだ曼荼羅は善無畏所伝の曼荼羅のみであり、現図曼荼羅を学んではない。それ故、正統な密教を学んだ弘法大師空海が伝えた現図曼荼羅とその口伝は、『大日経疏』よりも優れていると、慈雲は位置づけているのである。

### 浄厳の新安祥寺流曼荼羅への批判

慈雲が生まれる十数年前に没した浄厳(一六三九～一七〇二)は、江戸初期に活躍した真言僧であり、事相においては新安祥寺流の開祖として知られている。また、如法真言律を唱え戒律の復興を目指し、また慈雲の研究

を行うなど、慈雲の業績と相通ずる点があるといえる。

しかし、慈雲は、曼荼羅に関して、浄厳を厳しく批判している。浄厳は、現図曼荼羅に対していくつかの変更を加えた曼荼羅を作製した。たとえば、現図の中台八葉の蓮華は赤色であるが、浄厳はこれを白色に改めた。慈雲はこのような変更についての批判を『両部曼荼羅隨聞記』の中で展開している。広本・略本ともに浄厳を批判する同趣意の文があるが、略本では浄厳の名を挙げておらず、広本では実名を避け「有師」と記している。ここでは、略本によって、慈雲の浄厳批判を引用しよう。

胎藏の中台八葉の蓮華、現図は赤色に書き、經疏は白色なり。何故に白色とす。芬陀利の白蓮たる、その事極成す。經疏は但に胎藏に依るが故に、其の事の如くして其の理極成す。大師は両部を該ぬるが故に、金界は白にして胎藏は赤なり。大師も若し但だ胎法を伝へば、則中台蓮華の白たる、其の異望無きなり。疏に云く、三藏の説かく、西方の蓮華に多種あり云。芬陀利之華百葉計あるべし。葉々相承け、円整にして愛すべし。最外の葉極めて白し云。今は両部を兼伝ふるが故に、經疏に異にして別に差排有るなり。然るに浄厳師、此等の意味を察せず。經疏に依て両部の曼荼を改め画く。顧ふに其の志は護法の為の故に是なり。其の事は相伝を失するが故に非なり。〔両部曼荼羅隨聞記略本〕『慈雲尊者全集』第八卷、三七四—三七五頁

胎藏の現図曼荼羅では、中台八葉の蓮華は赤色に画かれているが、經疏では、これを白色に画くように説いている。經疏では白蓮華 (pundarikā) を画くように示されているから、もし胎藏曼荼羅だけの相承であれば、白色で問題はないが、弘法大師空海は金剛界と胎藏の両部を伝えているので、金剛界は白色、胎藏は赤色とする。しかし、浄厳はこれらの伝を知らず、經疏という文献のみに従って、曼荼羅を改めてしまい、曼荼羅に示されていた深意を失ってしまったっていると慈雲は批判しているのである。続いて慈雲は、



何となれば嚴師の以謂らく、現図の曼荼、画工或は価やすきの賤いやしに由て其の彩色を省き、或は直あたいたの貴たかきに由て其の丹青を増せり。而して展転差謬、白色も或は赤色となれりと。其の証をいはば、中台の八葉、經疏は内心妙白蓮と有るに、現図は赤蓮に書き、一切智印の如き、經疏は其の角下に向ふに、現図は上に向へり。是くの如きの相違往々に是れあり。故に唯だ是れ差謬と思ひ、其の赤色を改めて白とし、其の角上に向ふを改めて下に向へり。其の他の相違も一々改め画けり。又其の金界、現図は九会こことに共に独鈷三鈷互ひに界道に画けり。嚴師は敢て其の相を画かず。蓋し此れ東寺高雄の曼荼を見ざるが故に然る乎。相伝正を得ざるの過、世に君子の過と云ふこと此の類なり。学密の者知らずんばあるべからざるものなり。〔兩部曼荼羅隨聞記略本〕

『慈雲尊者玉集』第八卷、三七五—三七六頁

と述べ、淨嚴が曼荼羅に変更を加えた理由を、画工が曼荼羅を安価に仕上げるために彩色を省いたり、あるいは高価なものにするために彩色を増やしていることが続けられるうちに、次第に經疏の記述と異なつた曼荼羅となつてしまひ、本来白色であるべき中台八葉の蓮華が赤色に変化してしまつたからであると付度している。また淨嚴は、ほかにも經疏の記述によつて曼荼羅を改めている。胎藏曼荼羅の遍知院に画かれる一切如来智印は、現図曼荼羅では頂点が上にくる三角形で画かれているが、淨嚴はこれを、經疏の記述に従つて頂点が下にくる逆三角形に改めた<sup>(8)</sup>。また金剛界曼荼羅では九会それぞれに画かれる独鈷や三鈷による界道を描いていない<sup>(9)</sup>。このように、曼荼羅を文献に即して書き改めてしまつたのは、弘法大師空海より伝わる現図曼荼羅における深意を失うものであると、慈雲は淨嚴を批判している。その一方、慈雲は、文献に忠実であるとする淨嚴の態度を、「護法の為の故に是なり」といい、また淨嚴について「近古の名徳にして、その志弘通に切なり」と述べており、淨嚴を評価していた面もあった。しかし、現図曼荼羅を深秘とし、經疏の曼荼羅を浅略とする立場の慈雲にとつて、現図

曼荼羅を軽んじ経疏の記述を優先する淨嚴の態度は、批判しなければならぬものであった。

### 小野と広沢

慈雲は、小野流と広沢流の浅深に関して、「野沢浅深」の項で、

九会を説くに、小野広沢の法流に同異の義あり。今は小野の説に據るなり。何となれば小野は深なり広沢は浅なり。〔兩部曼荼羅隨聞記〕『慈雲尊者全集』第八卷、九六頁

と述べ、広沢は浅略であり、小野流は深秘であると説いている。その例として、

若し其の修法の脇机に於て、小野は灑水塗香念珠と次でて安じ、広沢は塗香灑水念珠と序でて置く。其の表示を云はば、広沢は戒定慧と次づるが故に、即順常途の義にして浅略なり。小野は定戒慧と序づるが故に、三昧耶戒の義にして深秘なり。何となれば斯の戒は則定より得るが故に。又其の異なり。又五瓶の置き様、中瓶灌頂の時の如きは、野沢同く塔の後に置き、常には沢は前に置き野は後に置く。中瓶即仏塔と習ふが故に、亦野を深とす。又正覺壇に於ける、野は師資座を入れ替るが如き、又其の異なり。何故に替るとならば、大師恵果の入寂の後帰朝し給ふに、恵果現じて大師に逢ひ給ひしことあり。実に其の儀を示す。野沢の浅深大率是くの如し。〔兩部曼荼羅隨聞記〕『慈雲尊者全集』第八卷、九六—九七頁

と述べており、洒水・塗香・念珠の置き様と、中瓶の置き様、正覺壇における師資の座の入れ替えをあげ、広沢流が浅略であるのに対して、小野流を深秘であるとしている。

## 事相と教相

事相と教相の関係について、慈雲は「事相教相」の項で、次のように述べている。

当今の世多く事相教相と岐を分ち、事相者は教相者を笑ひ、教相者は事相者を侮る。皆是れ事教の意を得ざるが故なり。当流の習は是の如くならず。事相を離れて教相なく、教相を離れて事相なし。事相に違ふ教相は妄義なり。教相を謬る事相は妄伝なり。何となれば一々の事相の上の理を説く、即是れ教相なり。故に当相即道と云ひ、即事而真と云ふ。是の故に事教一致にして密義を尽すべし。八祖相承の教相は此の曼荼羅に有るなり。（『西部曼荼羅隨聞記』「慈雲尊者全集」第八卷、一一四頁）

慈雲は、事相と教相が乖離している状況を批判し、事相と教相は不離であり、事相と異なる教相はいつわりの教えであり、事相に即して説かれた理が教相であり、事相と教相の一致を心得て密教を学ぶべきであると述べており、また八祖相承の教相は、曼荼羅にあると説いている。

## 古義と新義

本地身説を説く古義と、加持身説を説く新義の教主義に関する議論について、慈雲は「本地加持」の項で次のように述べている。

大日経の教主中台大日如来に就き、或は本地身と云ひ、或は加持身と云ふ、南山根嶺に論ずる処の如し。其の中或は本地身を深とし加持身を浅とし、或は加持身を勝とし本地身を劣とす。或は本地身の説無説を争ふ。委くは両山所談の如し。当流の所伝は然らず。本地身の処に即加持身あり。加持身の赴く処いつも本地身あり。

り。故に加持身を離れて本地身なく、本地身を離れて加持身なし。本地加持は唯これ其の体維れ一なるのみ。故に大疏に云く、若し加持身を見れば即是れ本地法身を見る。若し本地法身を見る時即行者の自身なりと文り。是なり。斯く意得ると云へども、一概に彼の義を廢せず。或は古義の人なれば本地身說法等を説き、又且新義の人なれば加持身說法等を談ず。ただし穿鑿に過ぎて固執するを斥ふべし。敢えて偏執せざる、是れ当流の習ひと云ふ。〔『兩部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、一一五—一二六頁〕

教主義について、本地身説と加持身説が主張されるが、慈雲は当流の伝として、どちらか一方を主張するのではなく、本地身と加持身は不離の關係にあると示している。また一概に本地身説、加持身説を排斥するものではないが、自らの主張に固執するのは斥けるべきであり、本地身説と加持身説の一方に固執しないのが当流の伝であると示している。

### 大日如来と釈迦如来

慈雲の思想的特徴として、釈迦在世を理想としたことが指摘されている。それでは、『兩部曼荼羅隨聞記』では、釈迦牟尼如来をどのようにとらえているのであろうか。

まず兩部曼荼羅について、慈雲は、胎藏曼荼羅は理法身の曼荼羅であるので六大を体としており、金剛界曼荼羅は智法身の曼荼羅であるので五智を体とす<sup>(10)</sup>と述べており、また金剛界曼荼羅は智法身の曼荼羅なので、仏界のみを表した曼荼羅であり、胎藏曼荼羅は理法身の曼荼羅なので、十界を備えている<sup>(11)</sup>と兩部曼荼羅を捉えている。そして金剛界曼荼羅に関して、慈雲は、『金剛頂經』に説かれる五相成身觀による一切義成就菩薩の成仏は、自受用身の成仏<sup>(12)</sup>であり、その始成正覺は法爾常恒の成仏を色究竟天に顕したものであり、しかもその体は、今に

始まったものではないと述べている。また、「法応不離」の項では、

色究竟天成道の如きは、自受用身の成道なり。即是れ三時を越へたる如来日なり。菩提樹下成道の如きは、變化身の成道なり。即是れ周の昭王の時に当れる世間日なり。受用身とは本なり。變化身とは迹なり。此の本、此の迹、一に非ず異に非ず。相即相融し、二而不二、不二而二なり。此を真応不離と云ひ、此を性相常住と云ふ。密教の意是なり。〔『兩部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、一三五頁〕

とあり、色究竟天で成仏して金剛界曼荼羅の主尊となる大日如来は、自受用身の成道であり、時間的な限定を超えた存在であるのに対して、世間に現れ、菩提樹下で成道した釈迦牟尼如来は變化身であり、「本」である自受用身と「迹」である變化身は二而不二、不二而二であり不離の關係にあると述べている。

次に胎藏曼荼羅に関して、

当流の所伝は此の現図に依り四種法身を以て配釈するなり。謂く総じて此の四重壇を自性受用變化等流の四身とす。中院は自性身なり。八葉九尊同一毘盧遮那の故に。一重二重は受用身なり。此に自受用他受用の差排あり。第三重は變化身なり。外金剛部は等流身なり。此は是れ其の用に就くが故に異なり。故に自性受用變化等流と云ふ。その体に約せば一なり。故に俱に法身と云ふなり。〔『兩部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』

第八卷、二三〇—二三二頁〕

と述べ、胎藏曼荼羅を四種法身に配当し、中台八葉院は自性身、一重は自受用身、二重は他受用身、三重は變化身、外金剛部は等流身とし、そのはたらきは異なるが、その体は一であり、みな法身であると示している。また、何をか自性身と云ふ。所謂の唯仏与仏乃能窮尽諸法実相の位是なり。何をか自受用と云ふ。謂く亦是れ唯仏与仏の境界にして、初地已上分に法身を得る是れなり。故に法のある処即是れ自受用なり。何をか他受用と

する。謂く初地已上、他の有縁の感見に随ふの辺是なり。變化身とは何ぞ。謂く即是れ方便為究竟の句の法門にして、八相成道して衆生を度するが如きは是なり。（『両部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、二三一頁）

とあり、變化身は、方便により八相成道して衆生を濟度するものであると述べている。

つまり、慈雲にとって、世間に出現して八相成道を示した釈迦牟尼如来とは、両部の大日如来の變化身であり、大日如来と不離の關係にあるものであり、伝統的な真言宗の仏陀觀をふまえたものである。

### 顯教と密教

先に、慈雲は真言宗自体も絶対視することなく相對化しているのか、という問いを設定した。そこで、ここでは、慈雲が顯教と密教をどう捉えていたのか、どのように密教を位置づけていたのかを見てみよう。

慈雲は「神通妙用」の項で、

大凡神通妙用、華嚴等の顯經には、皆機の感見に由ると云へり。吾秘密教は爾らず。即是れ自受法樂の義とす。皆是れ本有の具徳を顯現するが故なり。顯密の差別かくの如し。（『両部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』

第八卷、一〇三—一〇四頁）

慈雲尊者と密教

と述べている。仏の神通のすぐれたはたらきは、『華嚴經』などの顯教經典では、衆生の機根に應じて顯れるとされる。しかし、密教では衆生が本来具えている仏徳を顯現することであるので、自受法樂の義であり、両者には相違があることを示している。これは、『二教論』に「變化身による地前の菩薩や二乘凡夫のための三乗の教えと、他受用身による地上の菩薩のための一乗の教えが顯教であり、自性身・自受用身が自受法樂のために自眷

属とともにそれぞれ三密門を説くのが密教である」と説かれるのに沿うものである。また「顕密大意」の項では、諸法の法位に住する時は常に是れ密教なり。衆生の機見に従ふ時は常に是れ顕教なり。既に機見に従ふ。然る時は華嚴法華と云へども皆顕なり。既に法位に住す。然る時は教論声論と云へども皆密なり。而るに彼は我相を執するが故に外道たり。此は法位に住するが故に密教たり。大師の所謂る顕密は人にあり、声字は非なりとは此の謂いなり。(『両部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、一〇五頁)

とあり、諸法が法位に住している境界が密教であり、衆生の機根に応じたあり方を顕教としている。そして衆生の機根に応じる時は、『華嚴經』『法華經』の教えは顕教であり、法位に住した見方をするならば、外道の教説でも密教であるとする。そして弘法大師空海の『般若心経秘鍵』に「顕教と密教の違いは人によるものであり、声字によるわけではない」と説かれるのは、この意味であるとまとめている。また、「顕密浅深」の項では次のように説明している。

顕教は皆是れ上転門にして捨劣得勝転迷開悟す。故に猶微細妄執を存せり。是の故に法華は三乗を会して一乘に帰すといへども、猶是れ上転門なり。故に大師の住心論の中に第八の住心に撰す。華嚴は因分可説果分不可説と云ふといえども、相即相入を説くが故に、一分下転門にかかる。故に住心論の中に第九の住心に撰す。秘密は当相即道即事而真の故に、即是れ上転下転非上非下転門なり。故に住心論の中に第十の住心とし給ふ。(『両部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、一〇六頁)

すなわち、顕教は上転門であり、法華も上転門であるので第八住心の境地であり、華嚴は一分下転門を説くので第九住心であり、密教は当相即道即事而真であり、上転下転非上非下転門であるので第十住心であると説いており、真言宗の十住心の教判によって、密教と顕教を位置づけていることがわかる。

以上のように、慈雲は真言宗の伝統的な顕密の教判、十住心の教判に則って、密教と顕教を捉えて、密教を究極のさとの境地としており、真言宗自体を相対化している訳ではないと言える。

また慈雲は、宝生如来の四親近の一である金剛宝が大日如来より金剛宝などの灌頂を受けることを、

是の如きは即法爾加持の境界の故に自性会場の事なり。其の余の顕教及び印度の外道、支那の孔老の教も、乃至一切治生産業も、一に是れ皆法爾加持の一分なり。（『両部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、一四九—一五〇頁）

と説明しており、この灌頂は法爾加持の境界であるから、大日如来が自受法楽のために説法する場である自性会の上のことであると説き、他の顕教や外道の教えや、さらには世俗の職業もまた法爾加持の一分とであると述べている。このようにあらゆる教えを法爾加持の一分とする立場に立てば、顕教の教えもまた軽んじてはならないこととなる。それ故、慈雲は真言行者の修行について、

其の修行たる、七仏所説の法是れなり。謂く総じて之れを言はば、戒に由て定を發し、定に由て慧を發し、遂に乃從顯入密す。（『両部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、二七九頁）  
と述べ、また

当流の所伝、七仏所説の法、一として余す所なく学ぶ。即是れ密教の本意なりと習う。（『両部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、二七九頁）

と述べており、密教だけではなく、七仏所説のあらゆる法を学ぶのが習いであると慈雲は説いているのである。



## 諸宗と密教

次に慈雲は、密教の立場から各宗をどのように捉えていたのかを見てみよう。まず華嚴と天台については、次のように述べている。

両部の大経を読むに法あり。興教大師云く、華嚴は則金剛頂経の浅略、法華は則大日経王の浅略と文り。説き得て妙なり。何となれば華嚴の法相は金剛頂と相応し、法華の法相は大日経と相応す。故に此の知見を開て読み去るべし。（『両部曼荼羅随聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、八三頁）

このように慈雲は、『華嚴経』は『金剛頂経』の浅略、『法華経』は『大日経』の浅略であるとする立場をとっている。そして華嚴宗の大成者である賢首大師法蔵（六四三～七一二）と、天台宗の大成者である天台大師智顛（五三八～五九七）については、

又夫れ此を羽翼する者は則天台賢首師か。何ぞや。華嚴を積するの妙は賢首師に如くはなく、法華を積するの妙は天台師に如くはなし。何を以てか然ることを知る。賢首の因陀羅網を以て積するは金剛頂の各具五智に相応し、天台の芬陀利華を以て積するは大日経の内心妙白蓮に相応す。賢首の一即一切を談するは金剛頂の法爾加持に相応し、天台の円融無礙を談するは大日経の十界平等に相応す。蓋し是の如きは天台賢首の長なり。若し夫れ賢首の因分可説、果分不可説を立するは其の教卑し。何となれば因分も可説不可説、果分も亦可説不可説なり。吾密教より見れば、皆是れ法爾法然の故に。因分も「字言説可得不可得、果分も亦「字言説可得不可得の故に。（『両部曼荼羅随聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、八三―八四頁）

とあり、法蔵が因陀羅網によって『華嚴経』を説明し、一即一切を説くのは『金剛頂経』と相応し、また智顛が

芬陀利華によつて『法華経』を説明し、円融無礙を説くのは『大日経』と相応するので、これらは法蔵、智顛の評価できる点であるが、密教が、すべては法爾法然であるから因分も「字言説可得不可得、果分もまた「字言説可得不可得であると説くのには、及ばない教えであると慈雲はみている。また慈雲は、「学密用心」の項でも、「法爾常恒加持」を説く密教から見れば、天台宗の智顛や湛然も、華嚴宗の法蔵や澄観も遠く及ばないと評している。<sup>16)</sup>

また四箇大乘については、慈雲は「四行浅深」の項で、次のように概括している。

此の四行菩薩、十住心の中六七八九の住心に摂し、此を四箇の大乘に配す。謂く瑜伽論等は第六他縁大乘心に摂して、弥勒の三昧なり。中論等は第七覚心不生心に摂して、文殊の三昧なり。法華は第八一道無為心に摂して、観音の三昧なり。華嚴は第九極無自性心にして普賢の三昧なり。而るに宝鑰に釈論五重の問答を引て、此の四の住心共に無明の辺域にして明の分位に非すと判じ給ふ。此は是れ彼々の宗教、顕句義に就て然り。故に十住心論に此を浅略趣とす。然るに其の四菩薩の内証三昧に就かば、共に是れ明の分位にして真言密教なり。故に此を秘密趣とす。(『兩部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、二四二—二四三頁)

すなわち、胎藏曼荼羅の中台八葉院の四菩薩に四箇大乘を配当し、『瑜伽論』は第六他縁大乘心に摂せられ弥勒の三昧、『中論』は第七覚心不生心に摂せられ文殊の三昧、『法華経』は第八一道無為心に摂せられ観音三昧、華嚴は第九極無自性心に摂せられ普賢の三昧とし、各宗の教えは浅略の立場では密教ではないが、それぞれの菩薩の内証三昧につけば、真言密教であると述べ、『十住心論』に則して説明されている。

次に禪に関しては、

文に云く、金剛劍をもつて揮斫すと文り。和上曰く、此乃文殊の三昧耶形に就て云ふ。其の理は上に示すが

如し。一切如来皆悉く揮斫し尽す。以て知ぬ。臨済の仏に逢へば仏を殺し、祖に逢へば祖を殺すが如き、説相猶弱し。丹霞の寒夜に木仏を焼くが如き、勞して功なし。亦小ならずや。我が護摩法は大に異なり。吾が密教の天下に最尊最勝たる、日月の天に麗くが如し金剛利克。〔『阿部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、一五三—一五四頁〕

とあり、臨済の教えも密教に及ばないものと述べている。また次のようにも述べている。

禪家等の転迷開悟の修行は皆是れ大円鏡智の撰なり。設ひ豁然大悟と云ふと雖、猶是れ東方の三昧なり。布施等の一切福德門の修行は皆是れ平等性智の撰なり。読経等の一切智慧門の修行は皆是れ妙觀察智の撰なり。礼拝等の一切事業門の修行は皆是れ成所作智の撰なり。是れ此の四智を総撰する、是れを法界体性智と云ふ。是の故に知るべし。三乗となく一乗となく、皆是れ從顯入密せずして成仏することなきなり。此れ決定の説なり。学密の者深く信受すべし。〔『阿部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、一五九—一六〇頁〕

すなわち、禪宗などの修行は法界体性智をさとするものではなく、大円鏡智に撰せられるものであり、顯教より密教に入らなければ成仏できないと示されている。

また、律に關しては、次のように述べられている。

文に云く、毘首羯磨と文り。和上いわく、具には**𑖀𑖩𑖫𑖬**にして種々の義、**𑖀𑖩𑖫𑖬**作業の義なり。律に所謂る羯磨と云ふも、此の羯磨と同じく作業の義なり。然れば律戒羯磨も皆此の尊の三昧門なり。一切の羯磨を三昧とするが故に。世の法執なる徒は、動もすれば密教と顯教とは仏形から菩薩形と出家形との別にして万事皆別なりと云ふ。今家は爾らず。此の律相の羯磨も三十七尊の中の**𑖀𑖩𑖫𑖬**より等流して秘密莊嚴心なりと伝ふ。若し然らずと言はば、遮那の等流身何れの処にか在るや金剛業鏡。〔『阿部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』

第八卷、一五七頁)

すなわち、律の羯磨も、金剛界曼荼羅の不空成就如來の四親近の金剛業菩薩の三昧門であり、金剛業菩薩より等流したものであるので秘密莊嚴心であり、顕教と密教とが隔別したものと考えるのは間違いでであると説かれている。

神道と密教

晩年に、神道に関する多くの著作を著した慈雲は、『両部曼荼羅隨聞記』の中でも、神道に触れており、密教と神道の関係について論じている。

当流の木木氏灌頂の意、仏法の有為法に向かふが神道にして、神道の無為法に向かふが仏道と云ふなり。印言以て之を顕す。故に密教の即俗而真と云ふに例せば、神道は即真而俗と云ふべし金剛學竟（『両部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、一五八—一五九頁）

木木氏灌頂とは、西大寺流に伝わる松橋神祇灌頂のことで、三重の印明よりなる。その灌頂の意味するところは、仏教が世間の有為法に顕れたものが神道であり、神道が無為法に向かうものが仏教であると、慈雲は両者の関係を捉えている。また、「空中界畔」の項では、

和上曰く、此の五解脱輪の中の界畔、空中に有りや無しやと云ふに、相承の意は有るを以て正義とす。何となれば既に蘇悉地経にも、虚空に障礙あれば印明を以て破ると云ふ。然れば則其の界畔有るの義成ず。

又曰く、神書は真言僧の見るべき者なり。大いに密教を助く。何となれば其の理密教に近ふして、儒には遙かに過ぎて、顕教の釈家にも勝る。故に密教より見れば皆是れ法爾加持の一分なり。

又曰く、密教を助くる一事を云はば、神代卷に瓊々杵尊にじぎのみこと、天降り給ふ時、神あり天の八衢やちまたに立ちて口尻明くちかくれ耀す。猿田彦尊はれなりと云。此乃空中に界道あり又神等あるの例、其の八衢は即是れ界畔の故に、密教神道其の義一なり。独り神書の密教を助くるのみに非ず。大小乗の教何れにても見るべし。皆密教を助くるなり。(『両部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、一七二—一七三頁)

と述べており、神書は儒教や顕教の積家より優れたものであり、真言僧が学ぶべき書であることを説いている。また金剛界曼荼羅の界畔が空中に有ることの理解を助けるものとして、天孫降臨に登場する天の八衢を例に挙げ、神書は密教の理解を助けるものであると述べている。また神書に限らず、大小乗の何れの教えも、密教の理解を助けるために学ぶべき事が示されている。

一方、密教の意を用いなくて神書を理解しようとする者については、慈雲は批判をしている。曼荼羅には男形の諸尊と女形の諸尊があり、男形は智慧の徳を示し、女形は禪定の徳を示しており、これに準じて神書も理解されるべきであるという。たとえば、

然るに夫れ吾国の神道の如き此を知らず。其の陰陽の趣を示すを、実に迷情執着男神女神の会合よりして、国土山川火の神水の神を産生せりと思へり。人豈に山川草木等を産むの理あらんや。所謂る文を見謬り義を取り損なふて解解に墮す。不便なることなり。(『両部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、一六四頁)

と述べ、こうした解釈が誤読であることを指摘している。また、

曼荼羅は一切衆生の色心の実相にして、表徳門性功德のままなり。故に十界の当相宛然として皆有り。顕教は遮情の一辺にして唯理性門のみ。故に法華の如き、如来一代の本懐の教と雖、国土世間に神あることを説かず。華嚴は然らず。故に妙嚴品に国土世間に皆神号を説けり。是の故に其の法相たる金剛頂と相応す。第

九の住心に撰す。吾日本の神道、密教に甚だ相応すと云ふは、伊弉諾伊弉册の二神、四大神を産出し給ふ。各其の神号あり。神代卷の如し。謂く、みづばみ<sup>水</sup>しながとび<sup>空</sup>かぐつち<sup>火</sup>等と云ふ是なり。而るに神道者流、此の四大を説く、仏家に混ざると嫌ひ、専ら五行を以て神道の建立とす。若し然らば伊勢に何故に風の宮あるや。五行に於て風あることなし。豈に四大神有るに非ずや。是れ神道の意を得ざるが故なり。（『両部曼荼羅隨聞記』『慈雲尊者全集』第八卷、一七〇—一七一頁）

と述べ、密教と神道は相応するものなのに、四大を五行で解釈しようとする神道者流を、整合性のない説として批判している。

まとめ

以上、慈雲の密教に関する代表的著作である『両部曼荼羅隨聞記』に従って、慈雲の密教思想を検討してきた。慈雲の曼荼羅観において特徴的であるのは、文献の記述よりも、相承によって伝えられた図絵を重視する立場である。すなわち、両部の現図曼荼羅とは、付法の八祖によって相承された密教の根本を示すものである。そのため経疏の曼荼羅よりも現図曼荼羅のほうが相承の秘訣が盛り込まれた深秘な曼荼羅であるとされる。『大日経』は浅略と深秘の両方を含んでいるが、傍系である善無畏、一行による『大日経疏』に説かれる曼荼羅は浅略であり、現図曼荼羅こそが深秘な曼荼羅である。このような慈雲の立場からすれば、『大日経疏』に基づいて現図に変更を加えて浄嚴の曼荼羅は、容認しがたいものであった。

また慈雲は釈迦在世を理想としたと言われるが、『両部曼荼羅隨聞記』によれば、世間に出現して八相成道を示した釈迦とは法身大日如来の化身であり、慈雲の釈尊観は真言宗の仏陀観をふまえたものであるといえよう。

また慈雲は真言宗の顕密の教判、十住心の教判をふまえて諸宗を捉えており、真言密教をもつとも深奥な教説として第十住心に位置づけている。それと同時に、顕密のそれぞれの教え、外道の教説、神道、また治生産業までもが密教的世界（法爾常恒加持の境界）の中に内包されていると説く。あらゆるものは法爾加持の一分であるとする慈雲の立場によれば、大乘小乗のいずれの教えもまた軽んじるべきではなく、あらゆる教説は、密教の理解を助けるものとして学ぶべきであり、神書もまた、密教に相応するものとして学ぶべきものであると説く。すなわち慈雲の思想の特徴としてあげられる「超宗派的な性格」とは、『両部曼荼羅隨聞記』に従えば、密教を頂点とする「超宗派的な性格」なのである。

註

(1) 慈雲尊者飲光に関する主な研究には、次のようなものがある。

長谷寶秀 「慈雲尊者の話」「慈雲尊者の話」三密堂書店、平成二年。

木南卓一 「慈雲尊者 生涯とその言葉」三密堂書店、昭和三十六年。

岡村圭真 「慈雲 釈迦の生前を理想として」〔宗派別〕日本の仏教・人と教え2 真言宗 小学館、一九八五年。

また、沈仁慈 「慈雲の正法思想 Jiu's Concept of the True Dharma [インド学仏教学叢書10]」（山喜房佛書林、二〇〇三年）には、慈雲に関する詳細な研究目録が付されている。

(2) 「雑乳の水を飲まずと云ふのが尊者の御見識であるから、

佛教を説くには直に佛説の經文を用ひ、印度大論師の論を用ひらるるのみで、支那已來各宗の祖師の積はすべて用ひられません。又如来在世には宗派の分立なし、宗派の分立は如来滅後に起り、佛世を遠ざかるに随て宗派多く分れ、宗派が分れるに随つて愈々佛意に遠ざかると云ふ御思召で、痛く宗派の分立を嫌はれました。随つて御講釈の際にも、判教の事などは、多く沙汰せられなかつた様であり、「根本僧制」の中にも宗派の浅深を論ずることを禁ずるといふ一ヶ条があり、佛教諸宗を打て一団とする御思召であるから、受戒の弟子、随学の門人は真言天台は勿論、禪宗、浄土宗等の諸宗から集まつて居ります」長谷寶秀 「慈雲尊者の話」「慈雲尊者の話」（三密堂書店、平成二年）、三四—三五頁。

「如来在世の風に帰つて諸宗の者皆集まつて一味相合で行

かねばならぬ。宗派を張つて浅深を争ふべきものではないと云ふのが、尊者の御考へであります」長谷寶秀「慈雲尊者の正法律」『慈雲尊者の話』(三密堂書店、平成二年)、六〇頁。

「尊者は二千年百年前に出られた釈迦その人を眼中に置き、自らをその大弟子迦葉に擬してをられます。(飲光といふ諱は迦葉の意訳です。)そこで純粋に釈迦の精神を体得するには、「末世人師の説き行ふところに倣ふな、雑水の腐乳をすするな」(略伝)と説かれ、宗派の別に捉はれず、その源底に還り、大乘小乗の優劣の論に拘つてはならぬと説かれます。一代の藏経は釈迦の精神の歴史的に展開したものでありませう。尊者はその歴史的に展開した佛教教学をもふくめて釈迦の根本精神を洞察するといふ大見識を持つてをられたわけで、これが三学(戒・定・慧)兼備の修行によつて裏打ちされてゐるのです」木南卓一「慈雲尊者に学ぶことども——生涯・法語・筆跡——」『慈雲尊者の話』(三密堂書店、平成二年)、二五六頁。

「とりわけ、自派、他派を区別することなく、超宗派の立場から実践的な仏教統一の運動を展開する姿勢は、注目にあたいます。戒律の立場についても、四分、有部にとらわれず、基本に忠実で、しかも批判をうしなわず、形式的な戒律主義にしばられない態度をつらぬく。それは四宗兼学をかかげ、ひたすら仏道の成就をめざす仏弟子の僧伽・共同体を再現して、あくまで釈尊仏教を現代に復活させよう

とする宣言にほかならなかつた」岡村圭真「慈雲 釈迦の生前を理想として」『八宗派別V日本の仏教・人と教え2 真言宗』(小学館、一九八五年)、二七七頁。

「慈雲の正法観をそれぞれの活動に即して見るならば、まず仏教復古運動において、慈雲は仏陀の行じた法こそ正法であると定義し、仏在世のあり方を復興することに力を注いだ。すなわち、仏知見の実践として超宗派思想と梵学研究を、仏戒の実践として諸戒律の護持を、仏服の実践として如法の袈裟の制作を、仏行の実践として禪定を修することを提唱した」沈仁慈「慈雲の正法思想 Jun's Concept of the True Dharma [インド学仏教学叢書10]」(山喜房佛書林、二〇〇三年)、一九二頁。

(3)

第一卷

『阿部曼荼羅隨聞記』の各巻の項目は以下の通りである。

密藏体性 理界智界 赤蓮白蓮 都部別尊 阿部両界 阿部両界  
 部旨要 阿部説法 東密台密 曼荼阿字 mandala-va-  
 ntra 秘藏声字 阿重因果 阿部不二 野沢浅深 灌頂印  
 明 三十七尊 相承灌頂 神通妙用 顕密大意 顕密浅深  
 学密用心 曼荼羅教 普賢行願 事相教相 本地加持 四  
 身説法 九会密記 三輪差別 五色界道 金門蓮門

第二卷

羯磨会 金剛界 金剛頂經 法応不離 中因東因 三昧耶  
 三摩地 南方四尊 西方四尊 北方四尊 転識得智 四波  
 羅蜜 内四供養 外四供養 四摂 五色界道 五解脱輪



六大配属 三鈔界道 空中界畔 賢劫千仏 十六尊位 二十天位 焰中三鈔 四大明王 一百八尊

第三卷

三昧耶会 諸尊三形 陀羅尼形 内四供養 蓮華座処 宝珠浅深 微細会 供養会 四印会 一印会 五仏宝冠 九会相撰 理趣会 二会融撰 降三世羯磨会 降三世三昧耶会

第四卷

胎藏金剛 三句二種 三部三昧 三重四重 瓶水所標 中台院 十界大日 毘一切色 四智四行 四行浅深 旋轉不旋轉 霧即月光 遍知院 二迦葉 持明院

第五卷

観音院 三部三点 薩埵院 大力金剛 金剛童子 积迦院 四無量心 虚空藏院 十波羅蜜 千手金剛藏 两部不二

第六卷

文殊院 蘇悉地院 地藏院 除蓋障院 外金剛部院 十界 撰属 結勸宗要

附録十由

入曼荼羅所由 寄曼荼羅理趣 曼荼羅名義 曼荼羅体相 支分生曼荼羅 曼荼羅口伝 曼荼羅三種 曼荼羅布字 曼荼羅観行 見曼荼羅功德

(4) 『大日経疏』大正蔵三九・六三三上。

(5) 旋轉不旋轉は、中台八葉院の四仏と金剛界曼荼羅の四仏の方位との対応関係についての伝と、中台八葉院の四菩薩と

(7)

経疏曼荼羅の四菩薩、行法の時の四菩薩の方位に関する伝のこと。すなわち四仏の「旋轉」とは、金剛界曼荼羅の東方・阿閼如来を胎藏曼荼羅の北方・天鼓雷音如来に転じ、金剛界曼荼羅の南方・宝生如来を胎藏曼荼羅の東方・宝幢如来に転じ、金剛界曼荼羅の北方・不空成就如来を胎藏曼荼羅の南方・開敷華王如来に転ずることである。無量寿如来は、金胎两部曼荼羅ともに西方であり、その位置を転ずることがないので、「不旋轉」という。四菩薩については、現図曼荼羅は東南・普賢菩薩、西南・文殊菩薩、西北・観音菩薩、東北・弥勒菩薩と列し、経疏の曼荼羅は東南・普賢菩薩、西南・文殊菩薩、西北・弥勒菩薩、東北・観音菩薩と列し、行法の時は東南・普賢菩薩、西南・観音菩薩、西北・文殊菩薩、東北・弥勒菩薩と列する。このように、文殊・観音・弥勒は、その位置を転じているが、普賢は方位を転じないことを「不旋轉」という。

浄蔵の曼荼羅に関して、次のような研究がある。

上田霊城「浄蔵の密教思想」『密教文化』一〇九号。

中村凉應「浄蔵の新安祥寺流曼荼羅について」『密教学』三八号、平成十四年。

中台八葉の蓮華について、漢訳『大日経』には、「内心妙白蓮」(大正蔵一八・六下)と説かれている。なお蔵訳『大日経』にも“dbus su pa dma dkar po mchog” (服部本六五頁)とあり、『大日経』ではもともとpundarikā(白蓮華)を画くことが示されていた。また『大日経疏』でも

「内心妙白蓮者。此是衆生本心。妙法芬陀利花祕密標幟。花臺八葉。圓滿均等如正開敷之形」(大正藏三九・六三一中一下)とあり、『大日経』の「白蓮」を「芬陀利花(pundarika)」としたのである。

(8) 遍知院の一切如来智印の深秘と浅略について、慈雲は次のように記している。

「胎藏遍知院の中、一切智印の如き、大疏は其の鋭下<sup>サキ</sup>に向かふ。現図は之を上に向かふ。其の下に向かふが如きは、降伏四魔の標相の故に遮情門なり。其の上に向かふが如きは、仏魔同如の三昧の故に表徳門なり。既に情を遮す。豈に浅に非ずや。既に徳を表はす。豈に深に非ずや。然るに有師は其の深秘たる現図を改め、彼の浅略たる大疏に倣ふ。豈に相承の意を失するに非ずや。嗟乎有師は近古の名徳にして、其の志弘通に切なり。而るに疎失の此に至る明師に逢はざるに由れり。惜しいかな。」(『西部曼荼羅隨聞記』「慈雲尊者全集」第八卷、一二四—一二五頁)

(9) 独鈷や三鈷による界道について、慈雲は次のように記している。

「金界の九会は、会ごとに或は独鈷を以て界ひ、或は三鈷を以て界ふ。即是れ金剛界の義なり。画工は此を界道ふせと称す。然るに近古の有師、改め画きて此の相を省き、遂に金剛界の名義を失するに至る。其の相承の意を失ふ。以て知んぬべし。」(『西部曼荼羅隨聞記』「慈雲尊者全集」第八卷、一二四頁)

(10) 『西部曼荼羅隨聞記』「慈雲尊者全集」第八卷、九四—九五頁。

(11) 『西部曼荼羅隨聞記』「慈雲尊者全集」第八卷、二二二頁。

(12) 『西部曼荼羅隨聞記』「慈雲尊者全集」第八卷、一〇九頁。

(13) 『西部曼荼羅隨聞記』「慈雲尊者全集」第八卷、一一〇頁。

(14) 『定本弘法大師全集』第二集、七五頁。

(15) 『西部曼荼羅隨聞記』「慈雲尊者全集」第八卷、一〇八—一一頁。

(16) 法華や華嚴については、次の各項でも言及している。「金剛頂経」(『西部曼荼羅隨聞記』「慈雲尊者全集」第八卷、一三〇—一三一頁)、「三昧耶三摩地」(同、一四四頁)、「南方四尊」(同、一五〇頁)、「西方四尊」(同、一五六頁)、「四波羅蜜」(同、一六三—一六四頁)、「六大配属」(同、一七〇—一七二頁)、「三昧耶会」(同、一七九—一八〇頁)、「大力金剛」(同、二七二—二七五頁)。

〈キーワード〉慈雲尊者飲光、現図曼荼羅、淨嚴、神道